

センター模擬試験

第2回

数学 II B

解説と解答

数学Ⅱ・数学B

【解答・採点基準】

(100点満点)

問題番号	解答記号	正解	配点	自己採点
第1問	ア	4	1	
	イ	2	1	
	ウ, エオ	2, 40	1	
	カ	3	2	
	キ, ク	4, 1	2	
	ケコサ	256	3	
	($\sqrt{シ}$, ス)	($\sqrt{3}$, 0)	2	
	セ	2	2	
	ソ	6	3	
	タ	1	1	
	$\sqrt{チ}$	$\sqrt{3}$	1	
	$\frac{\sqrt{ツ}}{テ}$	$\frac{\sqrt{3}}{2}$	1	
	ト, ナ	3, 2	2	
	ニ	3	3	
	又, ネ, ノ, ハ	4, 2, 3, 3	3	
	ヒ	6	2	
	第1問 自己採点小計			(30)

問題番号	解答記号	正解	配点	自己採点
第2問	ア	2	2	
	イ	1	2	
	ウ	0	2	
	エ	1	2	
	オカ	$\frac{1}{6}$	3	
	キク, コ, サ, シ	$-\frac{2}{3}, 3, 3, 1$	4	
	スセ	$\frac{2}{3}$	3	
	ソタチ	$\frac{2}{27}$	2	
	ツ, テ	2, 4	2	
	ト, ナ	4, 2	4	
	$\frac{\sqrt{三}}{又}$	$\frac{\sqrt{2}}{4}$	4	
第2問 自己採点小計			(30)	
第3問	アイ	20	2	
	ウエ	-2	2	
	オカ, キク	-2, 22	2	
	ケ	2	1	
	コ, サ	b, a	1	
	シ, スセ, ソタ	- , 23, 22	3	
	チ	2	2	
	ツテ	20	2	
	ト, ナ, ニ, 又ネ	9, 2, 2, 20	2	
	ノ, ハ, ヒフ, ヘホ	9, 2, 19, 18	3	
第3問 自己採点小計			(20)	

問題 番号	解答記号	正 解	配点	自己 採点
第4問	$\frac{ア}{イ}$	$\frac{2}{5}$	2	
	ウ, エ	2, 2	2	
	オ, $\frac{カ}{キ}$	$1, \frac{2}{5}$	2	
	$\frac{ク}{ケ}$	$\frac{4}{7}$	1	
	$\frac{コ}{サ}$	$\frac{5}{7}$	1	
	$\frac{シ}{ス}$	2	2	
	サ	$\frac{5}{2}$	2	
	ツ	0	2	
	$\frac{テ}{ト}, \frac{ナ}{ニ}$	$\frac{1}{3}, \frac{2}{3}$	2	
	ヌ	1	2	
	$\frac{ネ\sqrt{ノ}}{ハ}$	$\frac{5\sqrt{7}}{4}$	2	
第4問 自己採点小計			(20)	

第1問 指数関数・対数関数，三角関数

[1] $f(x) = 10 \cdot 2^{x+2} - 4^x$, $g(x) = \log_8(2x-8)^3$ とする.

(1) $2^{x+2} = \boxed{\text{ア}} \cdot 2^x$, $4^x = (2^x)^{\boxed{\text{イ}}}$ であるから, $t = 2^x$ とすると

$$f(x) = -t^{\boxed{\text{ウ}}} + \boxed{\text{エオ}} t$$

と表される.

(2) $g(x) = \boxed{\text{カ}} \log_8(2x-8)$ と変形できる. さらに, 底の変換公式を用いると

$$g(x) = \log_2(x - \boxed{\text{キ}}) + \boxed{\text{ク}}$$

と変形できる.

(3) k を実数とする. $g(x) \leq 1$ を満たすすべての実数 x が $f(x) \geq k$ を満たすような最大の k の値は $\boxed{\text{ケコサ}}$ である.

[2] O を原点とする座標平面において, 2点 P, Q を

$$P(\cos \theta, \sin \theta), \quad Q(\sqrt{3} \sin 2\theta, \sqrt{3} \cos 2\theta)$$

とする. ただし, $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ とする.

(1) $\theta = \frac{\pi}{4}$ のとき, $Q(\sqrt{\boxed{\text{シ}}}, \boxed{\text{ス}})$ である.

(2) $\sin 2\theta = \cos\left(\frac{\pi}{\boxed{\text{セ}}} - 2\theta\right)$, $\cos 2\theta = \sin\left(\frac{\pi}{\boxed{\text{セ}}} - 2\theta\right)$ であるから, 3点 O, P, Q が同一直線上にあるのは

$$\theta = \frac{\pi}{\boxed{\text{ソ}}}$$

のときである.

また, $OP = \boxed{\text{タ}}$, $OQ = \sqrt{\boxed{\text{チ}}}$ であるから, $\frac{\pi}{\boxed{\text{ソ}}} < \theta < \frac{\pi}{2}$ のとき, 三角形 OPQ

の面積を $S(\theta)$ とすると

$$S(\theta) = \frac{\sqrt{\boxed{\text{ツ}}}}{\boxed{\text{テ}}} \sin\left(\boxed{\text{ト}}\theta - \frac{\pi}{\boxed{\text{ナ}}}\right)$$

と表される. よって, θ が $\frac{\pi}{\boxed{\text{ソ}}} < \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲を変化するとき, $S(\theta)$ は $\theta = \frac{\pi}{\boxed{\text{ニ}}}$ に

おいて最大となる.

(3) 線分 PQ の長さを l とすると

$$l^2 = \boxed{\text{ヌ}} - \boxed{\text{ネ}} \sqrt{\boxed{\text{ノ}}} \sin(\boxed{\text{ハ}}\theta)$$

と表される. θ が $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲を変化するとき, l は $\theta = \frac{\pi}{\boxed{\text{ヒ}}}$ において最小となる.

【解説】

問題

[1]

$$f(x) = 10 \cdot 2^{x+2} - 4^x, \quad g(x) = \log_8(2x-8)^3.$$

$$(1) \quad \begin{aligned} 2^{x+2} &= 2^2 \cdot 2^x = \boxed{4} \cdot 2^x, \\ 4^x &= (2^2)^x = 2^{2x} = (2^x)^{\boxed{2}} \end{aligned}$$

であるから, $t = 2^x$ とすると

$$\begin{aligned} f(x) &= 10 \cdot 4 \cdot 2^x - (2^x)^2 \\ &= -t^{\boxed{2}} + \boxed{40}t \end{aligned}$$

と表される.

$$(2) \quad \begin{aligned} \text{真数は正であるから, } (2x-8)^3 &> 0 \text{ より} \\ 2x-8 &> 0 \end{aligned}$$

すなわち

$$x > 4 \quad \dots \text{①}$$

である.

①のもとで, $g(x)$ を変形すると

$$g(x) = \boxed{3} \log_8(2x-8)$$

となる.

さらに, 底の変換公式を用いると

$$\begin{aligned} \log_8(2x-8) &= \frac{\log_2(2x-8)}{\log_2 8} \\ &= \frac{\log_2(2x-8)}{\log_2 2^3} \\ &= \frac{\log_2(2x-8)}{3} \end{aligned}$$

と変形できるから

$$\begin{aligned} g(x) &= 3 \cdot \frac{\log_2(2x-8)}{3} \\ &= \log_2(2x-8) \\ &= \log_2 2(x-4) \\ &= \log_2(x-4) + \log_2 2 \\ &= \log_2(x - \boxed{4}) + \boxed{1} \end{aligned}$$

となる.

$$(3) \quad g(x) \leq 1 \text{ より}$$

$$\begin{aligned} \log_2(x-4) + 1 &\leq 1 \\ \log_2(x-4) &\leq 0 (= \log_2 1). \end{aligned}$$

底の2は1より大きいので

$$\begin{aligned} x-4 &\leq 1 \\ x &\leq 5. \end{aligned}$$

①かつ②より, $g(x) \leq 1$ を満たす実数 x の範囲は

$$4 < x \leq 5$$

$$\text{㉞} \quad \begin{cases} a > 0 \text{ のとき} \\ a^p \cdot a^q = a^{p+q}, \quad (a^p)^q = a^{pq}. \end{cases}$$

$$\text{㉞} \quad \begin{cases} a > 0, a \neq 1, M > 0, r \text{ が実数のとき} \\ \log_a M^r = r \log_a M. \end{cases}$$

㉞ 底の変換公式

$a > 0, a \neq 1, b > 0, c > 0, c \neq 1$
のとき

$$\log_a b = \frac{\log_c b}{\log_c a}.$$

$$\text{㉞} \quad \begin{cases} a > 0, a \neq 1, M > 0, N > 0 \text{ のとき} \\ \log_a MN = \log_a M + \log_a N. \end{cases}$$

$$\text{㉞} \quad \log_2 2 = 1.$$

$$\text{㉞} \quad \begin{cases} a > 1, M > 0, N > 0 \text{ のとき} \\ \log_a M \leq \log_a N \iff M \leq N. \end{cases} \quad \dots \text{②}$$

である. よって, $t (= 2^x)$ のとり得る値の範囲は

$$2^4 < t \leq 2^5$$

より

$$16 < t \leq 32$$

である.

$$h(t) = -t^2 + 40t \text{ とおく.}$$

③を満たすすべての実数 t が $h(t) \geq k$ を満たすような最大の k の値を求めればよい.

$$h(t) = -(t-20)^2 + 400 \text{ より, ③において}$$

$$h(t) \geq h(32) = 256$$

であるから, 求める最大の k の値は $\boxed{256}$ である.

[2]

$$P(\cos \theta, \sin \theta), \quad Q(\sqrt{3} \sin 2\theta, \sqrt{3} \cos 2\theta).$$

(1) $\theta = \frac{\pi}{4}$ のとき, Q の座標は $(\sqrt{3} \sin \frac{\pi}{2}, \sqrt{3} \cos \frac{\pi}{2})$ すなわち

$$(\sqrt{\boxed{3}}, \boxed{0}) \text{ である.}$$

(2) $\sin 2\theta = \cos\left(\frac{\pi}{2} - 2\theta\right), \cos 2\theta = \sin\left(\frac{\pi}{2} - 2\theta\right)$ である.

$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ より, $-\frac{\pi}{2} < \frac{\pi}{2} - 2\theta < \frac{\pi}{2}$ であるから, 3点 O, P, Q が同一直線上にあるのは

$$\theta = \frac{\pi}{2} - 2\theta$$

$$\theta = \frac{\pi}{\boxed{6}}$$

のときである.

また

$$OP = \sqrt{\cos^2 \theta + \sin^2 \theta} = \boxed{1},$$

$$OQ = \sqrt{3 \sin^2 2\theta + 3 \cos^2 2\theta} = \sqrt{\boxed{3}}$$

である.

$\frac{\pi}{6} < \theta < \frac{\pi}{2}$ のとき $(-\frac{\pi}{2} < \frac{\pi}{2} - 2\theta < \theta < \frac{\pi}{2})$ なので

$$\angle POQ = \theta - \left(\frac{\pi}{2} - 2\theta\right) = 3\theta - \frac{\pi}{2}$$

である. したがって, 三角形 OPQ の面積を $S(\theta)$ とすると

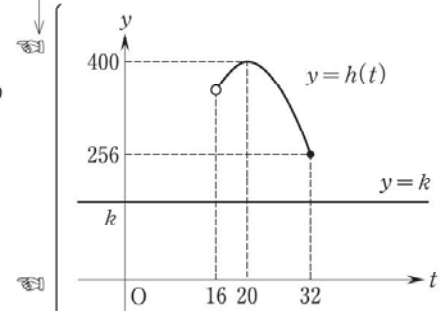
$$S(\theta) = \frac{1}{2} \cdot 1 \cdot \sqrt{3} \cdot \sin\left(3\theta - \frac{\pi}{2}\right)$$

$$= \frac{\sqrt{\boxed{3}}}{\boxed{2}} \sin\left(\boxed{3}\theta - \frac{\pi}{\boxed{2}}\right)$$

と表される.

$$\left\{ \begin{array}{l} a > 1 \text{ のとき} \\ p \leq q \Leftrightarrow a^p \leq a^q. \end{array} \right.$$

$$\dots \text{ ③ } \left\{ \begin{array}{l} f(x) = -t^2 + 40t. \end{array} \right.$$



$k \leq 256$ のとき, ③において

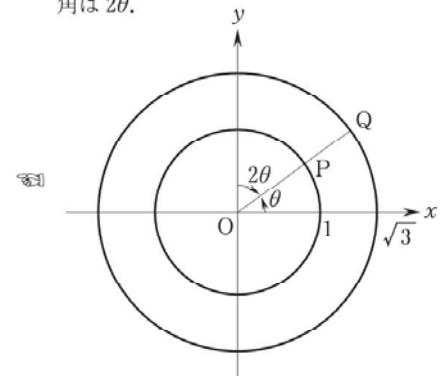
$$h(t) \geq 256 \geq k$$

となり, $h(t) \geq k$ を満たす.

点 P は円 $x^2 + y^2 = 1$ 上に,
点 Q は円 $x^2 + y^2 = 3$ 上にある.

$$\sin \frac{\pi}{2} = 1, \cos \frac{\pi}{2} = 0.$$

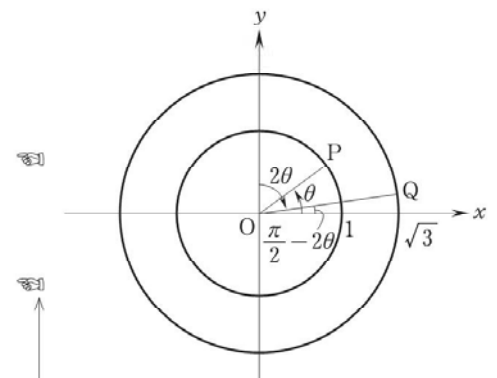
線分 OQ と y 軸の正の向きとのなす角は 2θ .



点 $A(x_1, y_1), B(x_2, y_2)$ のとき

$$AB = \sqrt{(x_2 - x_1)^2 + (y_2 - y_1)^2}.$$

また, $\sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1$.



$$S(\theta) = \frac{1}{2} OP \cdot OQ \sin \angle POQ.$$

θ が $\frac{\pi}{6} < \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲を変化するとき, $0 < 3\theta - \frac{\pi}{2} < \pi$ で

あるから, $S(\theta)$ は $3\theta - \frac{\pi}{2} = \frac{\pi}{2}$ すなわち $\theta = \frac{\pi}{3}$ において $0 < 3\theta - \frac{\pi}{2} < \pi$ のとき

で最大となる.

$0 < \sin\left(3\theta - \frac{\pi}{2}\right) \leq 1$ であるから, $S(\theta)$

の最大値は $\frac{\sqrt{3}}{2}$.

(3) 線分 PQ の長さを l とすると

$$\begin{aligned} l^2 &= (\cos\theta - \sqrt{3}\sin 2\theta)^2 + (\sin\theta - \sqrt{3}\cos 2\theta)^2 \\ &= \sin^2\theta + \cos^2\theta + 3(\sin^2 2\theta + \cos^2 2\theta) \\ &\quad - 2\sqrt{3}(\sin 2\theta \cos\theta + \cos 2\theta \sin\theta) \\ &= 1 + 3 - 2\sqrt{3}\sin 3\theta \\ &= 4 - 2\sqrt{3}\sin(3\theta) \end{aligned}$$

$$\sin 3\theta = \sin(2\theta + \theta)$$

$$= \sin 2\theta \cos\theta + \cos 2\theta \sin\theta.$$

と表される.

θ が $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲を変化するとき, $0 < 3\theta < \frac{3\pi}{2}$ である $0 < 3\theta < \frac{3\pi}{2}$ のとき,

から, l^2 は $3\theta = \frac{\pi}{2}$ すなわち $\theta = \frac{\pi}{6}$ において最小となる.

$-1 < \sin 3\theta \leq 1$ であるから

$$4 - 2\sqrt{3} \leq l^2 < 4 + 2\sqrt{3}.$$

$l > 0$ であるから, l も $\theta = \frac{\pi}{6}$ において最小となる.

l^2 が最小となるのは

$$\sin 3\theta = 1$$

のときである.

l^2 が最小のとき l も最小となる.

【又 ~ ハ】の別解】

$0 < \theta < \frac{\pi}{6}$ のとき $\angle POQ = \frac{\pi}{2} - 3\theta$, $\frac{\pi}{6} < \theta < \frac{\pi}{2}$ のとき

$\angle POQ = 3\theta - \frac{\pi}{2}$ であり

$$\cos\left(\frac{\pi}{2} - 3\theta\right) = \cos\left(3\theta - \frac{\pi}{2}\right) = \sin 3\theta$$

$$\cos(-x) = \cos x.$$

である.

したがって, $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ かつ $\theta \neq \frac{\pi}{6}$ のとき

$$\cos \angle POQ = \sin 3\theta$$

である. このとき, 三角形 OPQ に余弦定理を用いると

$$\begin{aligned} l^2 &= 1^2 + (\sqrt{3})^2 - 2 \cdot 1 \cdot \sqrt{3} \cos \angle POQ \\ &= 4 - 2\sqrt{3} \sin 3\theta \end{aligned}$$

$$PQ^2 = OP^2 + OQ^2$$

$$\dots (*) \quad - 2OP \cdot OQ \cos \angle POQ.$$

となる.

また, $\theta = \frac{\pi}{6}$ のとき

$$l^2 = (OQ - OP)^2 = (\sqrt{3} - 1)^2 = 4 - 2\sqrt{3}$$

であるから, (*) は $\theta = \frac{\pi}{6}$ のときも成り立つ.

よって, $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ において

$$l^2 = 4 - 2\sqrt{3} \sin 3\theta$$

である.

第2問 微分法・積分法

x の2次関数 $f(x)$, $g(x)$ を

$$f(x) = x^2$$

$$g(x) = \frac{1}{2}x^2 + x$$

とする. $f(x)$, $g(x)$ のそれぞれの導関数 $f'(x)$, $g'(x)$ は

$$f'(x) = \boxed{\text{ア}} x$$

$$g'(x) = x + \boxed{\text{イ}}$$

である.

放物線 $y=f(x)$ を C , 放物線 $y=g(x)$ を D とする.

- (1) 原点における C の接線の傾きは $\boxed{\text{ウ}}$ であり, 原点における D の接線の傾きは $\boxed{\text{エ}}$ である.

a を $\boxed{\text{ウ}} < a < \boxed{\text{エ}}$ を満たす実数とし, 直線 $y=ax$ を l とする.

C と l で囲まれた図形の面積を $S(a)$, D と l で囲まれた図形の面積を $T(a)$ とすると

$$S(a) = \frac{\boxed{\text{オ}}}{\boxed{\text{カ}}} a^3$$

$$T(a) = \frac{\boxed{\text{キク}}}{\boxed{\text{ケ}}} (a^3 - \boxed{\text{コ}} a^2 + \boxed{\text{サ}} a - \boxed{\text{シ}})$$

である.

$h(a) = S(a) + T(a)$ とおく. a が $\boxed{\text{ウ}} < a < \boxed{\text{エ}}$ の範囲を変化するとき, $h(a)$ は

$a = \frac{\boxed{\text{ス}}}{\boxed{\text{セ}}}$ において最小値 $\frac{\boxed{\text{ソ}}}{\boxed{\text{タチ}}}$ をとる.

- (2) t を正の実数とする. C 上の2点 $(t, f(t))$, $(2t, f(2t))$ における C の接線をそれぞれ m_1 , m_2 とする. 直線 m_1 , m_2 の傾きはそれぞれ

$$\boxed{\text{ツ}} t, \boxed{\text{テ}} t$$

である.

m_1 と m_2 のなす角を θ ($0 < \theta < \frac{\pi}{2}$) とすると

$$\frac{1}{\tan \theta} = \boxed{\text{ト}} t + \frac{1}{\boxed{\text{ナ}} t}$$

が成り立つ. 相加平均と相乗平均の関係を利用して, $\tan \theta$ は $t = \frac{\sqrt{\boxed{\text{ニ}}}}{\boxed{\text{ヌ}}}$ で最大となることが

わかり, このとき θ も最大となる.

【解説】

問題

$$f(x) = x^2,$$

$$g(x) = \frac{1}{2}x^2 + x$$

より

$$f'(x) = \boxed{2}x,$$

$$g'(x) = x + \boxed{1}$$

である.

$$C: y = f(x), \quad D: y = g(x).$$

(1) 原点における C の接線の傾きは

$$f'(0) = 2 \cdot 0 = \boxed{0}$$

であり, 原点における D の接線の傾きは

$$g'(0) = 0 + 1 = \boxed{1}$$

である.

a は $0 < a < 1$ を満たす実数である.

C と ℓ の交点の x 座標は, 方程式

$$x^2 = ax$$

の実数解である. この方程式を解くと

$$x(x-a) = 0$$

より

$$x = 0, a$$

である. また, D と ℓ の交点の x 座標は, 方程式

$$\frac{1}{2}x^2 + x = ax$$

の実数解である. この方程式を解くと

$$x^2 - 2(a-1)x = 0$$

$$x\{x - 2(a-1)\} = 0$$

より

$$x = 0, 2(a-1)$$

である.

導関数

$$(x^n)' = nx^{n-1} \quad (n = 1, 2, 3).$$

$$(c)' = 0 \quad (c \text{ は定数}).$$

接線の傾き

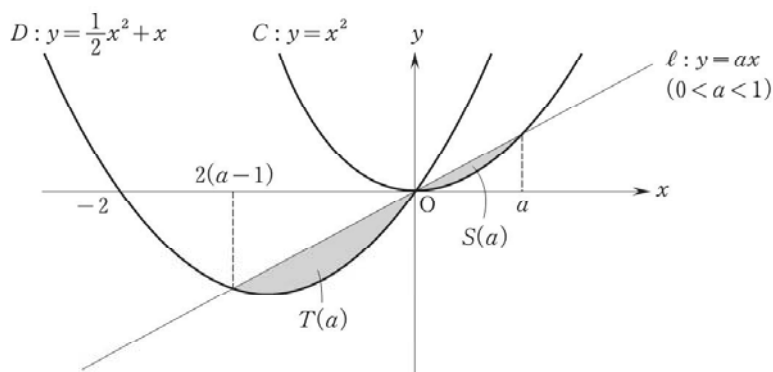
曲線 $C: y = f(x)$ 上の点 $(t, f(t))$ における C の接線の傾きは $f'(t)$ である.

$$\begin{cases} C: y = x^2, \\ \ell: y = ax \quad (0 < a < 1). \end{cases}$$

$$0 < a < 1 \text{ より, } 0 < a.$$

$$\begin{cases} D: y = \frac{1}{2}x^2 + x, \\ \ell: y = ax \quad (0 < a < 1). \end{cases}$$

$$0 < a < 1 \text{ より, } -2 < 2(a-1) < 0.$$



よって、 C と ℓ で囲まれた図形と D と ℓ で囲まれた図形は前図の影の部分であるから、面積 $S(a)$ は

$$\begin{aligned} S(a) &= \int_0^a (ax - x^2) dx \\ &= \left[\frac{a}{2}x^2 - \frac{1}{3}x^3 \right]_0^a \\ &= \frac{a}{2} \cdot a^2 - \frac{1}{3} \cdot a^3 \\ &= \frac{1}{6}a^3 \end{aligned}$$

であり、面積 $T(a)$ は

$$\begin{aligned} T(a) &= \int_{2(a-1)}^0 \left\{ ax - \left(\frac{1}{2}x^2 + x \right) \right\} dx \\ &= \int_{2(a-1)}^0 \left\{ -\frac{1}{2}x^2 + (a-1)x \right\} dx \\ &= \left[-\frac{1}{6}x^3 + \frac{a-1}{2}x^2 \right]_{2(a-1)}^0 \\ &= - \left\{ -\frac{1}{6} \cdot 8(a-1)^3 + \frac{a-1}{2} \cdot 4(a-1)^2 \right\} \\ &= -\frac{2}{3}(a-1)^3 \\ &= \frac{-2}{3} (a^3 - 3a^2 + 3a - 1) \end{aligned}$$

である。

$h(a) = S(a) + T(a)$ より

$$\begin{aligned} h(a) &= \frac{1}{6}a^3 - \frac{2}{3}(a^3 - 3a^2 + 3a - 1) \\ &= -\frac{1}{2}a^3 + 2a^2 - 2a + \frac{2}{3} \end{aligned}$$

であるから

$$\begin{aligned} h'(a) &= -\frac{3}{2}a^2 + 4a - 2 \\ &= -\frac{1}{2}(3a^2 - 8a + 4) \\ &= -\frac{1}{2}(3a-2)(a-2). \end{aligned}$$

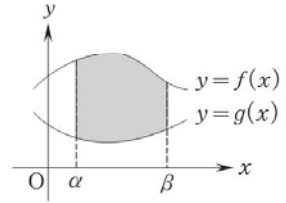
$0 < a < 1$ における $h(a)$ の増減は次のようになる。

a	(0)	...	$\frac{2}{3}$...	(1)
$h'(a)$		-	0	+	
$h(a)$		↘	極小	↗	

したがって、 $h(a)$ は $a = \frac{2}{3}$ において最小値

面積

区間 $\alpha \leq x \leq \beta$ においてつねに $g(x) \leq f(x)$ ならば、2曲線 $y=f(x)$, $y=g(x)$ および直線 $x=\alpha$, $x=\beta$ で囲まれた図形の面積は

$$\int_{\alpha}^{\beta} \{f(x) - g(x)\} dx.$$


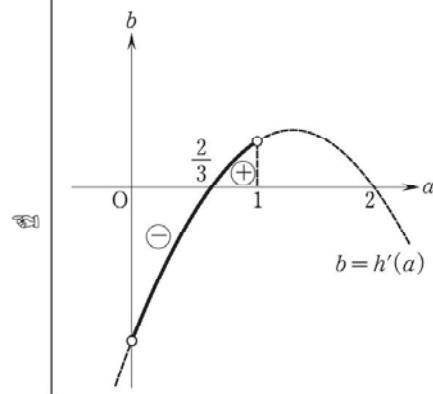
定積分

$$\int x^n dx = \frac{1}{n+1}x^{n+1} + C$$

(ただし $n=0, 1, 2$, C は積分定数) であり、 $f(x)$ の不定積分の一つを $F(x)$ とすると

$$\begin{aligned} \int_{\alpha}^{\beta} f(x) dx &= [F(x)]_{\alpha}^{\beta} \\ &= F(\beta) - F(\alpha). \end{aligned}$$

$h'(a)$ の符号の変化は、 $b=h'(a)$ のグラフをかくとわかりやすい。



$$\begin{aligned}
 h\left(\frac{2}{3}\right) &= S\left(\frac{2}{3}\right) + T\left(\frac{2}{3}\right) \\
 &= \frac{1}{6}\left(\frac{2}{3}\right)^3 - \frac{2}{3}\left(\frac{2}{3}-1\right)^3 \\
 &= \frac{\boxed{2}}{\boxed{27}}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \text{① } T(a) &= -\frac{2}{3}(a-1)^3 \text{ より} \\
 T\left(\frac{2}{3}\right) &= -\frac{2}{3}\left(\frac{2}{3}-1\right)^3.
 \end{aligned}$$

をとる.

(2) C 上の点 $(t, f(t))$ における C の接線 m_1 の傾きは

$$f'(t) = \boxed{2}t$$

$$\text{① } f'(x) = 2x.$$

であり、点 $(2t, f(2t))$ における C の接線 m_2 の傾きは

$$f'(2t) = 2 \cdot 2t = \boxed{4}t$$

である.

m_1 と x 軸の正の向きとのなす角を α $\left(-\frac{\pi}{2} < \alpha < \frac{\pi}{2}\right)$, m_2 と x 軸の正の向きとのなす角を β $\left(-\frac{\pi}{2} < \beta < \frac{\pi}{2}\right)$ とすると

$$\tan \alpha = 2t, \quad \tan \beta = 4t.$$

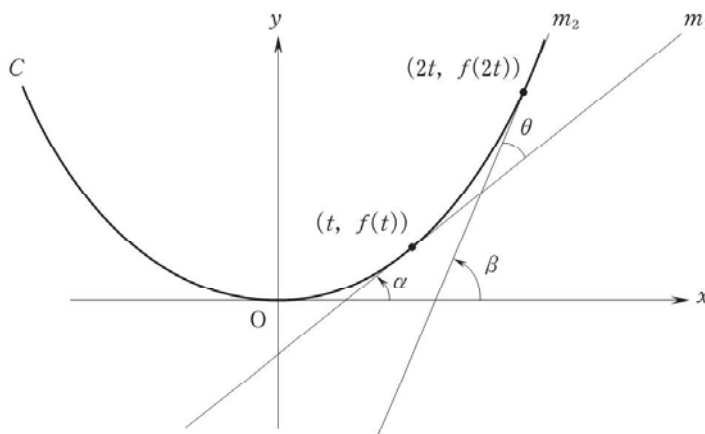
… ① ① 直線の傾きと正接

$0 < 2t < 4t$ であるから

$$0 < \tan \alpha < \tan \beta.$$

よって

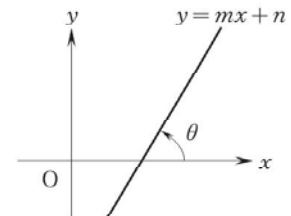
$$0 < \alpha < \beta < \frac{\pi}{2}.$$



直線 $y = mx + n$ と x 軸の正の向きとのなす角を

θ $\left(-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}\right)$ とすると

$$\tan \theta = m.$$



よって、 $0 < \beta - \alpha < \frac{\pi}{2}$ となり、 m_1 と m_2 のなす角 θ $\left(0 < \theta < \frac{\pi}{2}\right)$ は

$$\theta = \beta - \alpha$$

である.

これと ① より

$$\begin{aligned}
 \frac{1}{\tan \theta} &= \frac{1}{\tan(\beta - \alpha)} \\
 &= \frac{1 + \tan \beta \tan \alpha}{\tan \beta - \tan \alpha} \\
 &= \frac{1 + 4t \cdot 2t}{4t - 2t}
 \end{aligned}$$

加法定理

$$\tan(\beta - \alpha) = \frac{\tan \beta - \tan \alpha}{1 + \tan \beta \tan \alpha}.$$

$$\begin{aligned}
 &= \frac{8t^2+1}{2t} \\
 &= \boxed{4}t + \frac{1}{\boxed{2}t} \quad \dots \textcircled{2}
 \end{aligned}$$

となる.

$4t > 0, \frac{1}{2t} > 0$ であるから, 相加平均と相乗平均の関係を用いると

$$\frac{4t + \frac{1}{2t}}{2} \geq \sqrt{4t \cdot \frac{1}{2t}} \quad \dots \textcircled{3}$$

すなわち

$$4t + \frac{1}{2t} \geq 2\sqrt{2}$$

が成り立つ.

②より

$$\frac{1}{\tan \theta} \geq 2\sqrt{2}$$

すなわち

$$\tan \theta \leq \frac{1}{2\sqrt{2}}. \quad \dots \textcircled{4}$$

③において等号は $4t = \frac{1}{2t}$ かつ $t > 0$, つまり, $t = \frac{\sqrt{2}}{4}$ のとき成り立ち, このとき④においても等号が成り立つ.

したがって, $t = \frac{\sqrt{\boxed{2}}}{\boxed{4}}$ のとき $\tan \theta$ は最大となり,

$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ であるから, このとき θ も最大となる.

相加平均と相乗平均の関係

$a \geq 0, b \geq 0$ のとき

$$\frac{a+b}{2} \geq \sqrt{ab}.$$

(等号成立は $a=b$ のとき)

$4t = \frac{1}{2t}$ かつ $t > 0$ より

$$t^2 = \frac{1}{8} \text{ かつ } t > 0$$

であるから

$$t = \frac{1}{2\sqrt{2}} = \frac{\sqrt{2}}{4}.$$

$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ において, $\tan \theta$ は単調増加である.

【 $\boxed{\text{オ}} \sim \boxed{\text{シ}}$ の別解】

$$\begin{aligned}
 S(a) &= \int_0^a (ax - x^2) dx \\
 &= -\int_0^a x(x-a) dx \\
 &= -\left\{ -\frac{1}{6}(a-0)^3 \right\} \\
 &= \frac{1}{6}a^3,
 \end{aligned}$$

$$\int_\alpha^\beta (x-\alpha)(x-\beta) dx = -\frac{1}{6}(\beta-\alpha)^3.$$

$$\begin{aligned}
 T(a) &= \int_{2(a-1)}^0 \left\{ ax - \left(\frac{1}{2}x^2 + x \right) \right\} dx \\
 &= \int_{2(a-1)}^0 \left\{ -\frac{1}{2}x^2 + (a-1)x \right\} dx \\
 &= -\frac{1}{2} \int_{2(a-1)}^0 x\{x-2(a-1)\} dx \\
 &= \left(-\frac{1}{2} \right) \left(-\frac{1}{6} \right) \{0-2(a-1)\}^3
 \end{aligned}$$

$$\int_\alpha^\beta (x-\alpha)(x-\beta) dx = -\frac{1}{6}(\beta-\alpha)^3.$$

$$\begin{aligned} &= -\frac{2}{3}(a-1)^3 \\ &= -\frac{2}{3}(a^3 - 3a^2 + 3a - 1). \end{aligned}$$

第3問 数列

$\{a_n\}$ を $a_5=12$, $a_7=8$ である等差数列とする. $a_1 = \boxed{\text{アイ}}$ であり, 数列 $\{a_n\}$ の公差は $\boxed{\text{ウエ}}$ である. したがって, 数列 $\{a_n\}$ の一般項は

$$a_n = \boxed{\text{オカ}}n + \boxed{\text{キク}}$$

である.

(1) 数列 $\{b_n\}$ は

$$\begin{cases} b_1 = 0 \\ b_{n+1} = b_n + a_n \quad (n = 1, 2, 3, \dots) \end{cases}$$

を満たすとする.

数列 $\{a_n\}$ は数列 $\{b_n\}$ の $\boxed{\text{ケ}}$ 数列である. $\boxed{\text{ケ}}$ に当てはまるものを, 次の①~③のうちから一つ選べ.

- ① 等差 ② 等比 ③ 階差

n が 2 以上の自然数のとき

$$b_n = \boxed{\text{コ}}_1 + \sum_{k=1}^{n-1} \boxed{\text{サ}}_k$$

が成り立つ. よって

$$b_n = \boxed{\text{シ}}n^2 + \boxed{\text{スセ}}n - \boxed{\text{ソタ}} \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

となる.

(2) 数列 $\{c_n\}$ は

$$\begin{cases} c_1 = 0 \\ c_{n+1} = 2c_n + a_n \quad (n = 1, 2, 3, \dots) \end{cases} \dots\dots\dots (*)$$

を満たすとする. (*) は

$$c_{n+1} - \boxed{\text{チ}}(n+1) + \boxed{\text{ツテ}} = 2(c_n - \boxed{\text{チ}}n + \boxed{\text{ツテ}}) \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

と変形できるから

$$c_n = \boxed{\text{ト}} \cdot \boxed{\text{ナ}}^n + \boxed{\text{ニ}}n - \boxed{\text{ヌネ}} \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

となる.

さらに

$$\sum_{k=1}^n c_k = \boxed{\text{ノ}} \cdot \boxed{\text{ハ}}^{n+1} + n^2 - \boxed{\text{ヒフ}}n - \boxed{\text{ヘホ}} \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

である.

【解説】

等差数列 $\{a_n\}$ の初項を a , 公差を d とすると

$$a_n = a + (n-1)d$$

である. $a_5=12$, $a_7=8$ より

$$\begin{cases} a + 4d = 12, \\ a + 6d = 8. \end{cases}$$

問題

④ 等差数列の一般項
初項 a , 公差 d の等差数列 $\{a_n\}$ の一般項 a_n は
$$a_n = a + (n-1)d.$$

これを解いて $a = 20$, $d = -2$ であるから

$$a_1 = \boxed{20}, \text{ 数列 } \{a_n\} \text{ の公差は } \boxed{-2}$$

であり, 一般項は

$$\begin{aligned} a_n &= 20 + (n-1) \cdot (-2) \\ &= \boxed{-2}n + \boxed{22} \end{aligned}$$

である.

(1) $b_{n+1} = b_n + a_n$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) より

$$b_{n+1} - b_n = a_n \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

であるから, 数列 $\{a_n\}$ は数列 $\{b_n\}$ の階差数列である. よって,

$\boxed{\text{ケ}}$ に当てはまるものは $\boxed{\text{㉔}}$ である.

n が 2 以上の自然数のとき

$$b_n = \boxed{b}_1 + \sum_{k=1}^{n-1} \boxed{a}_k$$

が成り立つので

$$\begin{aligned} b_n &= \sum_{k=1}^{n-1} a_k \\ &= \frac{n-1}{2}(a_1 + a_{n-1}) \\ &= \frac{n-1}{2}\{20 + (-2n + 24)\} \\ &= (n-1)(-n + 22) \\ &= -n^2 + 23n - 22 \end{aligned}$$

$$\begin{cases} n \text{ が } 2 \text{ 以上の自然数のとき} \\ b_n = b_1 + \sum_{k=1}^{n-1} (b_{k+1} - b_k). \end{cases}$$

$$\begin{cases} \sum_{k=1}^{n-1} a_k \text{ は} \\ \text{初項 } a_1 = 20, \\ \text{末項 } a_{n-1} = -2n + 24, \\ \text{項数 } n-1 \\ \text{の等差数列の和である.} \end{cases}$$

である. これは $n = 1$ のときも成り立つので

$$b_n = \boxed{-}n^2 + \boxed{23}n - \boxed{22} \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

となる.

(2) $c_{n+1} = 2c_n + a_n$, $a_n = -2n + 22$ より

$$c_{n+1} = 2c_n - 2n + 22 \quad \dots \text{①}$$

である. ここで, α , β を n によらない定数として, ①が

$$c_{n+1} + \alpha(n+1) + \beta = 2(c_n + \alpha n + \beta) \quad \dots \text{②}$$

と変形できたとする. ②は

$$c_{n+1} = 2c_n + \alpha n - \alpha + \beta$$

と書き直せるので

$$\begin{cases} \alpha = -2, \\ -\alpha + \beta = 22 \end{cases}$$

すなわち $\alpha = -2$, $\beta = 20$ とすれば, ①は②のように変形できる.

したがって, ①は

$$c_{n+1} - \boxed{2}(n+1) + \boxed{20} = 2(c_n - 2n + 20)$$

と変形でき, $d_n = c_n - 2n + 20$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) とおくと

$$d_{n+1} = 2d_n \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

となる. よって, 数列 $\{d_n\}$ は初項

$$d_1 = c_1 - 2 \cdot 1 + 20 = 18,$$

$$\text{例} \quad c_1 = 0.$$

公比 2 の等比数列であるから

$$d_n = 18 \cdot 2^{n-1} = 9 \cdot 2^n \quad (n = 1, 2, 3, \dots).$$

$c_n = d_n + 2n - 20$ であるから

$$c_n = \boxed{9} \cdot \boxed{2}^n + \boxed{2}n - \boxed{20} \\ (n = 1, 2, 3, \dots)$$

となる.

さらに

$$\sum_{k=1}^n c_k = \sum_{k=1}^n (9 \cdot 2^k + 2k - 20)$$

$$= \frac{9 \cdot 2(2^n - 1)}{2 - 1} + 2 \cdot \frac{n(n+1)}{2} - 20n$$

$$= \boxed{9} \cdot \boxed{2}^{n+1} + n^2 - \boxed{19}n - \boxed{18} \\ (n = 1, 2, 3, \dots)$$

である.

例 和の公式

$$\sum_{k=1}^n ar^{k-1} = \frac{a(r^n - 1)}{r - 1} \quad (r \neq 1),$$

$$\sum_{k=1}^n k = \frac{n(n+1)}{2},$$

$$\sum_{k=1}^n c = cn \quad (c \text{ は定数}).$$

第4問 平面ベクトル

三角形 OAB において、辺 OB を 2:3 に内分する点を C とする。このとき

$$\overrightarrow{OC} = \frac{\boxed{\text{ア}}}{\boxed{\text{イ}}} \overrightarrow{OB}$$

である。

(1) 辺 AB の中点を M とする。このとき

$$\overrightarrow{OM} = \frac{1}{\boxed{\text{ウ}}} \overrightarrow{OA} + \frac{1}{\boxed{\text{エ}}} \overrightarrow{OB}$$

である。次に、直線 OM と直線 AC の交点を D とする。点 D は直線 OM 上にあるから、実数 s を用いて $\overrightarrow{OD} = s\overrightarrow{OM}$ と表される。また、点 D は直線 AC 上にあるから、実数 t を用いて $\overrightarrow{AD} = t\overrightarrow{AC}$ と表され

$$\overrightarrow{OD} = (\boxed{\text{オ}} - t)\overrightarrow{OA} + \frac{\boxed{\text{カ}}}{\boxed{\text{キ}}} t\overrightarrow{OB}$$

である。したがって

$$s = \frac{\boxed{\text{ク}}}{\boxed{\text{ケ}}}, \quad t = \frac{\boxed{\text{コ}}}{\boxed{\text{サ}}}$$

である。

(2) $OA = 4$, $OB = 5$, $AB = 6$ とする。

$$\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} = \frac{\boxed{\text{シ}}}{\boxed{\text{ス}}}$$

であり、三角形 OAB の面積は $\frac{\boxed{\text{セソ}}\sqrt{\boxed{\text{タ}}}}{\boxed{\text{チ}}}$ である。

直線 AB 上に点 P をとり、直線 OP と直線 AC が直交するときを考える。

このとき、 $\overrightarrow{OP} \cdot \overrightarrow{AC} = \boxed{\text{ツ}}$ であるから

$$\overrightarrow{OP} = \frac{\boxed{\text{テ}}}{\boxed{\text{ト}}} \overrightarrow{OA} + \frac{\boxed{\text{ナ}}}{\boxed{\text{ニ}}} \overrightarrow{OB}$$

である。さらに、直線 OP と直線 AC の交点を E とすると、点 E は線分 OP を $\boxed{\text{ヌ}}$:1 に内分

し、三角形 OAE の面積は $\frac{\boxed{\text{ネ}}\sqrt{\boxed{\text{ノ}}}}{\boxed{\text{ハ}}}$ である。

【解説】

問題

辺 OB を 2:3 に内分する点が C であるから

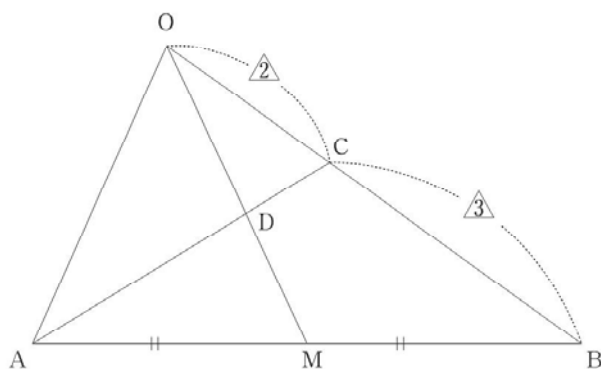
$$\overrightarrow{OC} = \frac{2}{5} \overrightarrow{OB} \quad \dots ①$$

である。

(1) 辺 AB の中点が M であるから

$$\overrightarrow{OM} = \frac{1}{2} \overrightarrow{OA} + \frac{1}{2} \overrightarrow{OB} \quad \dots ②$$

である。



点 D は直線 OM 上にあるから、実数 s を用いて

$$\overrightarrow{OD} = s \overrightarrow{OM}$$

と表される。これと ② より

$$\overrightarrow{OD} = \frac{s}{2} \overrightarrow{OA} + \frac{s}{2} \overrightarrow{OB} \quad \dots ③$$

である。また、点 D は直線 AC 上にあるから、実数 t を用いて

$\overrightarrow{AD} = t \overrightarrow{AC}$ と表され

$$\overrightarrow{OD} - \overrightarrow{OA} = t(\overrightarrow{OC} - \overrightarrow{OA})$$

より

$$\overrightarrow{OD} = (1-t) \overrightarrow{OA} + t \overrightarrow{OC}$$

と表される。これと ① より

$$\overrightarrow{OD} = \left(1-t\right) \overrightarrow{OA} + \frac{2}{5} t \overrightarrow{OB} \quad \dots ④$$

である。 $\overrightarrow{OA} \neq \vec{0}$, $\overrightarrow{OB} \neq \vec{0}$, $\overrightarrow{OA} \times \overrightarrow{OB}$ であるから、③, ④ より

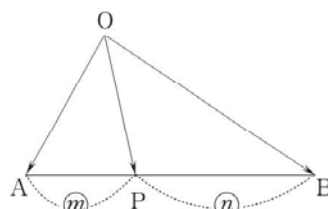
$$\begin{cases} \frac{s}{2} = 1-t, \\ \frac{s}{2} = \frac{2}{5}t \end{cases}$$

が成り立つ。これを解くと

$$s = \frac{4}{7}, \quad t = \frac{5}{7}$$

である。

内分点



線分 AB を $m:n$ に内分する点が P であるとき

$$\overrightarrow{OP} = \frac{n \overrightarrow{OA} + m \overrightarrow{OB}}{m+n}$$

特に、点 P が線分 AB の中点のとき、すなわち $m=n=1$ のとき

$$\overrightarrow{OP} = \frac{1}{2} \overrightarrow{OA} + \frac{1}{2} \overrightarrow{OB}.$$

④ $\alpha, \beta, \alpha', \beta'$ が実数で、 $\vec{a} \neq \vec{0}$, $\vec{b} \neq \vec{0}$, $\vec{a} \times \vec{b}$ のとき

$$\alpha \vec{a} + \beta \vec{b} = \alpha' \vec{a} + \beta' \vec{b}$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \alpha = \alpha', \\ \beta = \beta'. \end{cases}$$

(2) $|\vec{OA}|=4$, $|\vec{OB}|=5$, $|\vec{AB}|=6$ である.

$$|\vec{AB}|^2=6^2 \text{ より}$$

$$|\vec{OB}-\vec{OA}|^2=36$$

すなわち

$$|\vec{OB}|^2-2\vec{OA}\cdot\vec{OB}+|\vec{OA}|^2=36$$

である. これに $|\vec{OA}|=4$, $|\vec{OB}|=5$ を代入すると

$$5^2-2\vec{OA}\cdot\vec{OB}+4^2=36$$

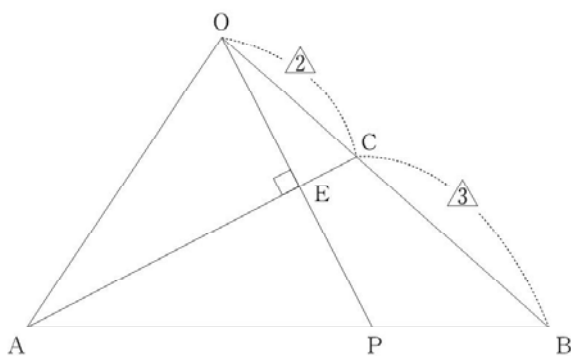
より

$$\vec{OA}\cdot\vec{OB}=\frac{\boxed{5}}{\boxed{2}}$$

である. また, これを用いると, 三角形 OAB の面積は

$$\begin{aligned} \Delta OAB &= \frac{1}{2}\sqrt{|\vec{OA}|^2|\vec{OB}|^2-(\vec{OA}\cdot\vec{OB})^2} \\ &= \frac{1}{2}\sqrt{4^2\cdot 5^2-\left(\frac{5}{2}\right)^2} \\ &= \frac{\boxed{15}\sqrt{\boxed{7}}}{\boxed{4}} \end{aligned}$$

である.



点 P は直線 AB 上にあるから, 実数 k を用いて $\vec{AP}=k\vec{AB}$ と表され

$$\vec{OP}-\vec{OA}=k(\vec{OB}-\vec{OA})$$

より

$$\vec{OP}=(1-k)\vec{OA}+k\vec{OB}$$

である. 直線 OP と直線 AC が直交することより

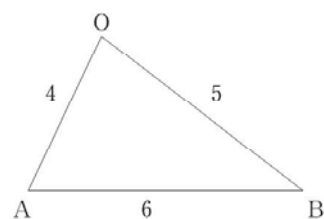
$$\vec{OP}\cdot\vec{AC}=\boxed{0}$$

であり

$$\{(1-k)\vec{OA}+k\vec{OB}\}\cdot\left(\frac{2}{5}\vec{OB}-\vec{OA}\right)=0$$

が成り立つ. さらに計算すると

$$-(1-k)|\vec{OA}|^2+\left(\frac{2}{5}-\frac{7}{5}k\right)\vec{OA}\cdot\vec{OB}+\frac{2}{5}k|\vec{OB}|^2=0$$



三角形 OAB に, 余弦定理を適用して

$$\begin{aligned} \cos\angle AOB &= \frac{4^2+5^2-6^2}{2\cdot 4\cdot 5} \\ &= \frac{1}{8}. \end{aligned}$$

よって

$$\begin{aligned} \vec{OA}\cdot\vec{OB} &= |\vec{OA}||\vec{OB}|\cos\angle AOB \\ &= 4\cdot 5\cdot \cos\angle AOB \\ &= \frac{5}{2} \end{aligned}$$

と求めてもよい.

⑤ より

$$\cos\angle AOB=\frac{\frac{5}{2}}{4\cdot 5}=\frac{1}{8}$$

であるから

$$\sin\angle AOB=\sqrt{1-\left(\frac{1}{8}\right)^2}=\frac{3\sqrt{7}}{8}.$$

よって

$$\begin{aligned} \Delta OAB &= \frac{1}{2}OA\cdot OB\cdot \sin\angle AOB \\ &= \frac{1}{2}\cdot 4\cdot 5\cdot \frac{3\sqrt{7}}{8} \\ &= \frac{15\sqrt{7}}{4} \end{aligned}$$

と求めてもよい.

… ⑥

$\vec{OP}\perp\vec{AC}$ より

$$\begin{aligned} \vec{OP}\cdot\vec{AC} &= |\vec{OP}||\vec{AC}|\cos\frac{\pi}{2} \\ &= 0. \end{aligned}$$

① より

$$\begin{aligned} \vec{AC} &= \vec{OC}-\vec{OA} \\ &= \frac{2}{5}\vec{OB}-\vec{OA}. \end{aligned}$$

となり, これに $|\overrightarrow{OA}|=4$, $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} = \frac{5}{2}$, $|\overrightarrow{OB}|=5$ を用いる

と

$$-(1-k) \cdot 4^2 + \left(\frac{2}{5} - \frac{7}{5}k\right) \cdot \frac{5}{2} + \frac{2}{5}k \cdot 5^2 = 0$$

$$16(k-1) + \left(1 - \frac{7}{2}k\right) + 10k = 0$$

より

$$k = \frac{2}{3}$$

となる. これと ⑥ より

$$\overrightarrow{OP} = \frac{\boxed{1}}{\boxed{3}} \overrightarrow{OA} + \frac{\boxed{2}}{\boxed{3}} \overrightarrow{OB} \quad \dots \text{⑦}$$

である.

次に, 直線 OP と直線 AC の交点 E について考える. 点 E は直線 OP 上にあるから, 実数 ℓ を用いて $\overrightarrow{OE} = \ell \overrightarrow{OP}$ と表され, これと ⑦ より

$$\overrightarrow{OE} = \frac{\ell}{3} \overrightarrow{OA} + \frac{2\ell}{3} \overrightarrow{OB} \quad \dots \text{⑧}$$

である. また, 点 E は直線 AC 上にあるから, 実数 m を用いて $\overrightarrow{AE} = m \overrightarrow{AC}$ と表され

$$\overrightarrow{OE} - \overrightarrow{OA} = m(\overrightarrow{OC} - \overrightarrow{OA})$$

より

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OE} &= (1-m)\overrightarrow{OA} + m\overrightarrow{OC} \\ &= (1-m)\overrightarrow{OA} + \frac{2}{5}m\overrightarrow{OB} \end{aligned} \quad \dots \text{⑨}$$

である.

$\overrightarrow{OA} \neq \vec{0}$, $\overrightarrow{OB} \neq \vec{0}$, $\overrightarrow{OA} \times \overrightarrow{OB}$ であるから, ⑧, ⑨ より

$$\begin{cases} \frac{\ell}{3} = 1 - m, \\ \frac{2\ell}{3} = \frac{2}{5}m \end{cases}$$

が成り立つ. これを解くと

$$\ell = \frac{1}{2}, \quad m = \frac{5}{6}$$

⑧ と $\overrightarrow{OB} = \frac{5}{2}\overrightarrow{OC}$ より

$$\overrightarrow{OE} = \frac{\ell}{3}\overrightarrow{OA} + \frac{5\ell}{3}\overrightarrow{OC}$$

である. また, 点 E は直線 AC 上にあるから, $\overrightarrow{OA} \neq \vec{0}$, $\overrightarrow{OC} \neq \vec{0}$,

$\overrightarrow{OA} \times \overrightarrow{OC}$ より

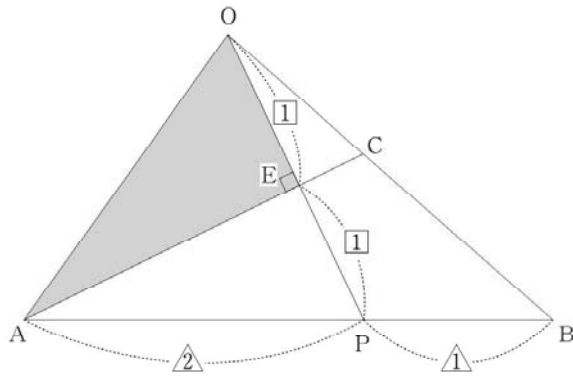
$$\frac{\ell}{3} + \frac{5\ell}{3} = 1$$

$$\ell = \frac{1}{2}.$$

このように ℓ の値を求めることもできる.

である. よって, $\overrightarrow{OE} = \frac{1}{2}\overrightarrow{OP}$ であるから, 点 E は線分 OP を $\overrightarrow{OE} = \ell \overrightarrow{OP} = \frac{1}{2}\overrightarrow{OP}$.

$\boxed{1}$:1 に内分する点である.



また、⑦より点Pは辺ABを2:1に内分する点であるから、
 三角形OAEの面積は

$$\begin{aligned}
 \triangle OAE &= \frac{1}{2} \triangle OAP \\
 &= \frac{1}{2} \left(\frac{2}{3} \triangle OAB \right) \\
 &= \frac{1}{3} \triangle OAB \\
 &= \frac{1}{3} \cdot \frac{15\sqrt{7}}{4} \\
 &= \frac{\boxed{5} \sqrt{\boxed{7}}}{\boxed{4}}
 \end{aligned}$$

$$\triangle OAB = \frac{15\sqrt{7}}{4}$$

である。